

[シンポジウム：家族看護学，その専門性とは]

5. 家族看護学—理論と実践と研究の統合に向けて

高知女子大学看護学部

野 嶋 佐由美

家族看護は、家族をケアの対象として位置づけ、家族の健康や家族のセルフケアの向上を目指しているところがユニークな点である。家族看護学は、確立されたひとつの専門領域というよりも、構築され発展されつつある領域である。家族看護学を専門とした看護者により、家族の健康促進、セルフケアの向上を支えることのできる専門的な知識や、実践の中で培ってきた有効な技の体系化、理論—実践—研究の統合化が試みられている段階である。それゆえに、様々な課題を抱えてはいるが、多くの看護実践者や研究者がそれぞれの英知を出し合って、構築しようとしている将来性のある領域であると言えよう。

我が国においても、各専門領域からクリニカルナーススペシャリスト(CNS)が誕生し、看護実践の場を変革している。家族看護CNSの育成に向けて、日本看護系大学協議会からカリキュラム案も提示されている。日本看護系大学協議会は、「家族看護CNSの教育目標」として、

1. 家族看護の対象である家族を系統的にとらえ、専門的な知識に基づいて看護活動を展開することができる。すなわち、家族の健康をアセスメントする能力と技術、家族に対して看護過程を展開する能力と技術、家族を援助する専門的な技術、家族の代弁者としての能力と技術を修得する。
2. 家族看護の領域に関して研究の企画推進者となることができる。
3. 家族看護の領域に関わる他職種とのコーディネーションの役割がとれる。
4. 家族看護の領域でコンサルテーションを行うことができる。

5. 家族看護の領域で新しい援助技術を開発し、変革者となることができる。

の5つを提案している。

高知女子大学看護学部大学院修士課程看護学研究科においては、日本看護系大学協議会の提案したカリキュラムを参考として、家族看護学領域を設置した。このプログラムでは、家族看護の現象を理論的な視点から捉え、それに基づいて家族を全体としてアセスメントし、介入していくことのできる能力—すなわち、理論—研究—実践を統合することができる能力を修得することができるカリキュラムを構築している。

各専門領域のCNSにおいても、もちろん患者だけではなく、家族をも含めて質の高いケアを提供していく役割を担っている。従って、家族看護の要素を含んでいるとも考えられる。しかし、患者個人に焦点を当てた働きかけは、必ずしも家族が望んでいることとは限らず、家族の立場を脅かす場合もある。さらに、医療者が期待する家族の役割を取らない家族もいる。このような家族は、臨床の中では「対応困難な家族」「問題家族」として捉えられる傾向がある。このような場合、特に家族看護CNSが家族の立場にたって働きかけることにより、患者にも家族にも質の高い看護ケアを提供することができる。

伝統的な家族主義が根強く残っている我が国においては、倫理的な判断も患者個人だけでなく、家族をも含めて考える場合が多い。時には、両者の立場が相反する場合もありうる。このような複雑な状況においても、家族看護CNSは重要な役割を果たすことができるであろう。